

Origami Tanteidan Newsletter 折紙探偵団新聞

43号

千羽鶴折形
二百周年

拾
斜



折紙は数学(幾何学)的である。折紙の幾何学的な研究は、

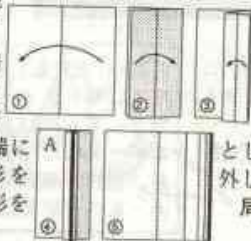
1. 折紙設計
 2. 伏見康治氏の折紙の幾何学
 3. イタリアの藤田文章氏の研究
 4. 芳賀和夫氏のオリガミクス
 5. フランスのJ.Justin氏の研究
 6. 東秀明氏や筆者の数学
- 等々たくさんある。1~4は実証に、5と6は論理体系に重きを置いている。本連載では、前者を自然科学的折紙の幾何学、後者を数学的折紙の幾何学と呼ぶことにする。

両者の相違点の一つに厳密な定義の有無がある。ここでいう折紙の定義とは、不切正方形一枚折り以外を折紙として認めるかどうかといった意味の線引きではない。研究対象の折紙枠を厳密に認識しているかという事である。

自然科学的折紙の幾何学には数学でいうところの厳密な折紙の定義は存在しない。個々の折紙を手にして観察して法則を見出す。現物が目の前に存在するから、定義を神経質に考える必要がない。一方数学的折紙の幾何学では、論理的に確立した数学を使って折紙を料理する。折紙を数学に馴染む形にして数学という巨大な論理体系に組み込めば、既存の数学の定理を使って折紙の定理が得られる。

数学でいう厳密な折紙の定義を少し説明しよう。①正方形の用紙を縦に半分に折る。②上の1枚を半分に折る。③さらに上の1枚を半分に折る。この作業を無限に繰り返す。④こうしてできたものをAと呼ぶ。Aは折紙であろうか?「現に折っているのに、何か問題があるのか?」というのが普通の反応であろう。

⑤Aをひろげると端はど密な(交互に山谷の)平行折り線が現われる。⑥この端に同じ広さの正方形をくっつける。正方形を



くっつけたまま元通りにたたむ。⑦これをBと呼ぶ。ここで問題:「Bにおいて、くっつけた部分の表裏はどうなっているか?」答えは「答えられない」である。どんなに複雑な折紙作品であっても、きちんと折られていれば折った面がどこを向いているかははっきりしている。Bのどこに問題があるのだろうか。またどう処理すればよいのだろうか?こういうとき数学でもっとも簡単な対応をする。Bを研究対象からはずすのである。



る。「どの部分でも十分に狭い範囲内では有限」ということを表わす。Bにおいて、折り線が密に集まった点(⑦の点O)ではどんなに狭い範囲、例えば半径1ミリの円内でも、折り線は無数にあるから局所有限ではない。一方平織りでは、半径100メートルの円内であっても、折り線の数には有限であるから局所有限である。

以上のようにA, B, 平織りと具体例に出会う度に折紙の定義も揺れ動く。しかしいつまでも揺れていたのでは困る。「私はこうする」と決めなければならない。筆者の定義は次のようなものである。

定義 線分、半直線、直線による平面全体の分割が次の条件を満たすときに平坦折紙折り線図という。

- (1)局所有限である。
- (2)線の交点や端点を通らない任意の閉曲線 γ に対して、 γ が横切る線を順に l_1, \dots, l_n とすると、 l_1, \dots, l_n に関する線対称移動を順に繰り返すと元に戻る。

この定義は、

- (a)平坦なものだけを対象とする。
 - (b)折った作品ではなく展開図で議論する。
 - (c)普通の正方形用紙ではなく無限に広い平面を折ることを考える。
 - (d)山折りと谷折りについては後で考える。
- 等々を主張している。

普通の折紙とかけ離れたこの定義、特に(c)は受け入れ難いであろう。しかしこれが論理を重視する数学の普通の姿勢である。

折り鶴に代表されるように、完成形で片方の面しか外にでない性質を片面性という。次回までに片面性や山折り谷折りの厳密な(数学に馴染む)定義を考えてみたい。



第1回 折紙の定義

ここで改めて「研究対象の折紙の定義は何?」と問おう。誘導したことになるが、「折り線の数があるもの」というのが普通の答えであろう。

平織りは規則的な折り線構造を持つ平坦な折紙である。平織りはどんなに広い紙でも(原理的には)折ることができる。無限に広い平面で折った平織りを考えることも可能でありそれが平織り本来の姿である。「折り線の数があるもの」という枠を設けると平織りは研究対象からはずれる。平織りは数学の研究対象として興味深い。Bのように除外したくない。

局所有限という数学用語があ

折紙時評

第3回
をつた



まえがわ じゅん Jun Maekawa

前川 淳

■引越しました。見晴らしがよく、夜は大阪のラジオ局の受信状態も良好です。

「季刊をる」が創刊準備をしていたのは、わたしが折り紙に「復帰」した頃にちょうど重なる。「復帰」のきっかけは「をる」創刊とは直接関係はなく、川崎敏和さんに誘われてとある学会に出席したことと、生活が安定した(1)ことであるが、これは願ってもないタイミングだった。「をる」創刊号の内容と体裁は、折り紙から離れていたわたしに、「ほら、折り紙はこんなに発展して楽しくなっているよ」と呼びかけてくれたのである。そこに発表した作品は、正直言うと不本意なものも少なからずあったが、エッセイなどの文章は、(読者が楽しかったどうかは別に)書いていて実に楽しかった。

雑誌の休刊は、多くの場合廃刊を意味する。再び「をる」が復刊することを望むことにおいては人後に落ちないが、状況は厳しいだろう。

そこで・・・、「をる」の連載エッセイ「アテンション・クリーズ」の暖めネタを、腐ってしまう前に、ここで一気に公開してしまうことにする。

折り目を意味する CREASE と「どうぞ」の PLEASE、R と L を無視した日本人らしい駄洒落のタイトル、「アテンション・クリーズ」。発案者の石川編集長とふたりで悩んだ末、あほらしさに惚れて決まったものである。布施さんが略して「アテ・クリ」と呼んだことから、それが通称となり、石川さんとの打ち合わせの際には、「アテクリ合うも他生の縁」とか「アテクリ3年柿8年」とか、駄洒落の駄洒落を連発していた。この洒落どおり、3年は続いて欲しかった。

以下、そのネタである。これは、2、3カ月前、まだ休刊が決まっていなかった編集部に送ったFAXを元になっている。なお、ここでネタを公開したからと言って、復刊の際にお呼びがかかればまだまだ書くことはいっぱいあるのでご安心(?)を。

1. 段ボール、葉、PCCP シェル
段ボールの元祖は、ただ段をつけただけの紙が前世紀に特許を取ったものである。そんなもので特許が取れるのかという話題からはいる。次に、大きな植物の葉にみられる段折りの構造や、缶コーヒーの「ダイヤカット缶」で実用化された三浦公亮氏のPCCPシェルなど、折り目が構造を強くするケースを、NHK教育TVのノリでまとめる。

2. デンマーク「LE KLINT」社 伝統の電灯

100年の伝統をもつランプの話題。1枚の紙(最近ではプラスチックペーパー)に、直線や曲線の様々な折り目を加えることでつくられた笠の数々。個人的にも購入する予定なので、うまくすれば取材費で買ったり、割引してもらおうという下心を秘めた一編。(ななどと言っているが、取材費を請求したことなどはない。念のため)

3. 折り鶴の展開図 得意のネタだが、茶碗の模様や箱根細工の意匠など、あの「手裏剣マーク」がこんなところにもという切り口でまとめる。布施さんの話によると、海に向こうに、目に映るあらゆる図形にバハリタ(小鳥)の展開図を発見するひとがいるらしい。これは、それを越える思いこみに満ちた妄想的な一編となる。

4. 折り鶴コレクションその後 これは、あれです。

5. ヨットの帆の縮帆法

ヨットの帆の縮帆法を、鈴木邦雄さんの研究である甲虫の翅の畳み方、太陽風を受けて宇宙空間を走る「ソーラーヨット」の帆の畳み方(ミウラ折り)などからみて、科学記事風にまとめた教養編。

6. 折鶴旅館泊まり歩き

高井弘明氏の情報によると、高松市に「折鶴旅館」なる割烹旅館がある。はたまた、山梨県石和市には「旅館・折鶴」なる宿がある。石和と言えば温泉。これを泊まり歩きして、「高松・石和、グルメと温泉の旅。折鶴の秘密に湯煙旅情」とかなんとか。もちろん

取材費は双樹舎持ちで。しかし、どうやらそれどころではなかったようである。

最後に、恒成・石川両編集長へ一言づつ。

「恒成らめ世は憂き身こそ悲しけれ其数にだに到らじと思へば」(拾遺集)

ううっ、これは改変なしでそのまんま。はまり過ぎだ。次は五右衛門の辞世から。

「石川の「をる」の出版尽きるとも世に紙折りの種は尽きまじ」ときたもんだ。



▲ LE KLINT 社のマーク

▼箱根細工の模付
折り鶴の展開図に似ている



前回の「吉野星」、川村みゆきさんが、打てば響くスピードで2種の作品をつくってくれた。これは、探偵団ホームページなどで紹介する予定だ。なお、拙作「吉野星2」の折り図も同ホームページで公開している。

岡村昌夫

第30回

おりがみ庵

ひでりごと



おかむら まさお Masao Okamura

■「をる」に書こうと思っていたことが

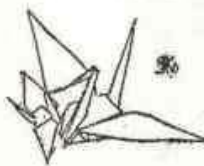
[どう折られてきたか]

『秘伝千羽鶴折形』が出版されてから200年。近年こそ愛好者が多くなったものの、出版後百何十年もの間、どのように受容されていたのかよく分からない。鶴の羽や尾やくちばしを繋げて折ることは簡単に出来ただろうが、「蓬莱」や「果竜鶴」などのウルトラCを理解して折り上げる人が果たしてどれだけ居たかと考えると落胆心もといえる気がする。その間の状況を窺わせる資料を紹介しよう。

[雑誌『小国民』の千羽鶴]

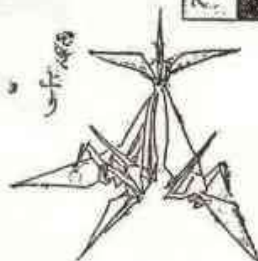
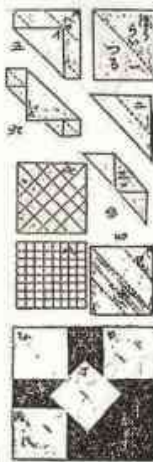
明治22年に発刊された幼少年(少女も含む)対象の雑誌『小国民』(月2回発行)の、明治26年(1893)から足掛け3年間、読者の投書の形で44種の折り紙が折り図つきで連載されている。内容はほとんどが所謂伝承折り紙で、中にはとても折り紙とは言えないようなものも混じっているものの、当時として非常に珍しい資料である。

その中で、1894年の9号に掲載された「蓬莱鶴」、1895年の17号の「餅拾鶴」「稲妻鶴」「村雲鶴」「果竜鶴」は、題名と言い完成形と言いい、明らかに『秘伝千羽鶴折形』である。ただ、原作と全く同じものは「稲妻鶴」と「餅拾鶴」(余分は切り捨て)、「村雲鶴」は素朴に改作されて小鶴の比率が大きくなっている。以



上の作品の整え方は、比較的容易な部類であって、完成形を見て考えれば容易に分かるはずのものである。

『小国民』に掲載された図を見ても、まあこんなところかと思うのであるが、意外なことに「蓬莱鶴」と「果竜鶴」は極めて素朴な解釈で作られていた。用紙を切るに当たって、製図をせずに、紙を折るだけで作図していることも分かる。不要部分はすべて切り落としているのも



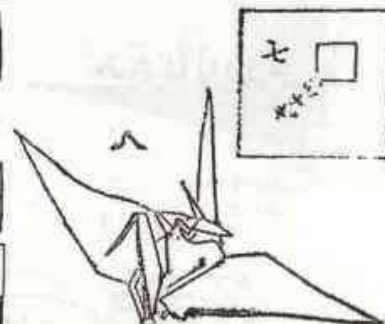
特徴である。「蓬莱鶴」とその他の投書者は別人、男性)

これらの投書者は『秘伝千羽鶴折形』そのものは見ていなかったのであろう。完成図の、それも写しか何かを見て考えた(ものを誰かに教わった)のだろう。或いは『千年遊折形鏡』のような海賊版風の書などを見たのだろうか。

[もみち屋の千代紙]

さらにこの資料は、後に大阪の「もみち屋」で販売された千代紙の図と極めて酷似し、しか

もこの明治の図の方が正確に描かれている。特に「果竜鶴」の背中後ろにははっきり開いた穴は「もみち屋」版には見えず、かつて笠原邦彦氏が「最新・折紙のすべて」(日本文芸社刊)で技巧的な解釈をされたところだが、



実は予想外に素朴なものであった。ただし、「もみち屋」版が『小国民』を見てデザインされたものと短絡して考えるわけにはいかない。明治の「蓬莱鶴」の図に欠けている左端の鶴の尾が「もみち屋」版に存在しているのは必ずしも重要ではないが、「もみち屋」版には有って、『秘伝千羽鶴折形』に無い「宝ぶね」などが『小国民』にも無いので、結論は出ないが、とにかく『秘伝千羽鶴折形』の受容史の欠落部分を埋める資料として大きな意味を有すると思う。

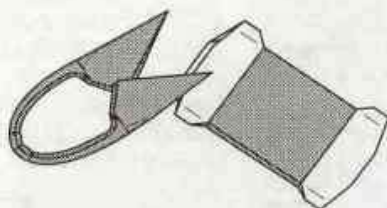
なお、筆者がかつて、すでに廃業してしまっていた「もみち屋」の専務だった今井四郎氏からお聞きしたところでは、創業者である先代の今井市之祐氏は、折り紙について何も知らず、千代紙のデザインは専属の職人に任せていたし、昭和17年ごろからは製造も止めてしまい、卸しだけの営業だったので、問題の千羽鶴千代紙は他から仕入れて販売したものだと思われるとのことであった。製造元は不明である。

糸きりばさみと

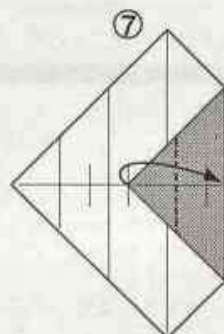
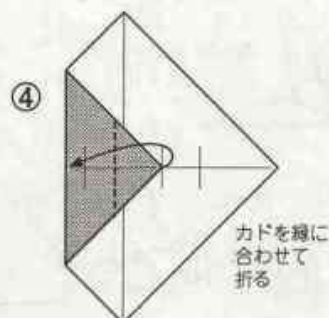
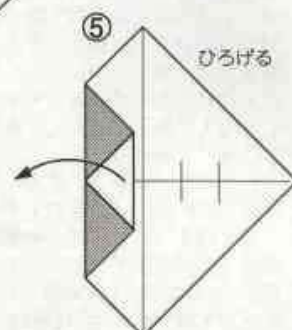
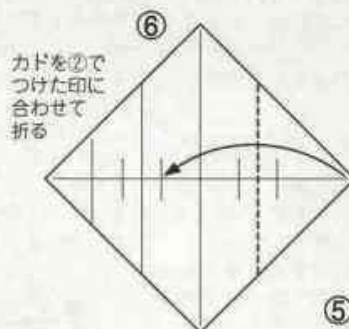
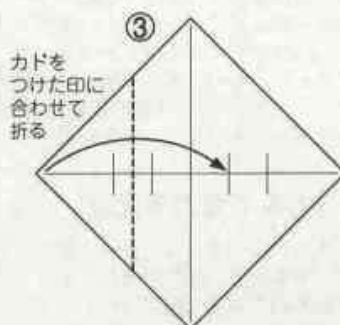
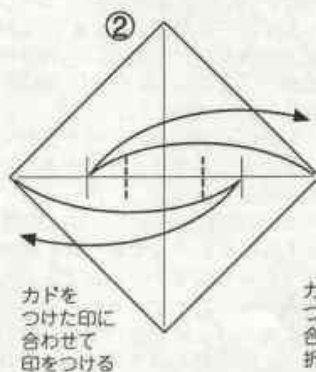
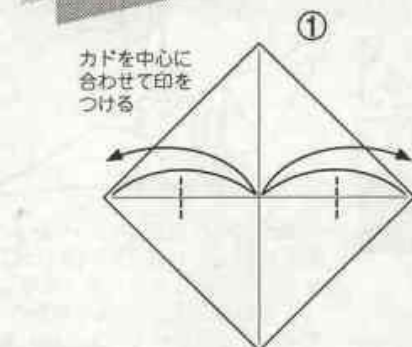
作/山梨雅弘

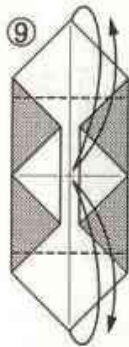
折り図/おりがみはうす

糸巻き

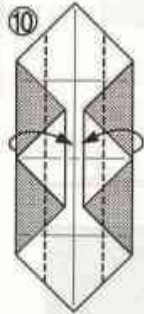


糸切りばさみ

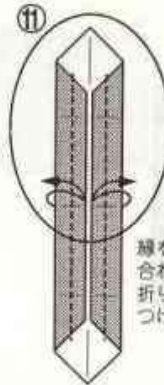




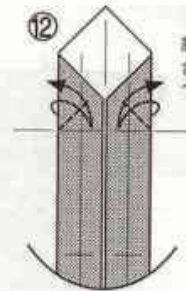
⑨ カドを
中心に
合わせて
折り筋を
つける



⑩ 線を中心に
合わせて折る



⑪ 線を中心に
合わせて
折り筋を
つける



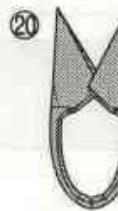
⑫ 線を折り筋に
合わせて折り筋を
つける



⑬ つけた折り筋の
交点で折り筋を
つける
反対側も同じ



⑲ カーブを
つけて
形を整える

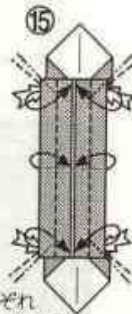


⑳ できあがり

ピアノ線を入れて
両端をのりづけす
れば動くハサミの
完成



⑭ 段折り



⑮ それぞれ
重なり部分の
内側をひろげながら
線を折り筋に
合わせて折る



⑱ 両方の
先端を
つまむ
ように
折る

横から
見た図

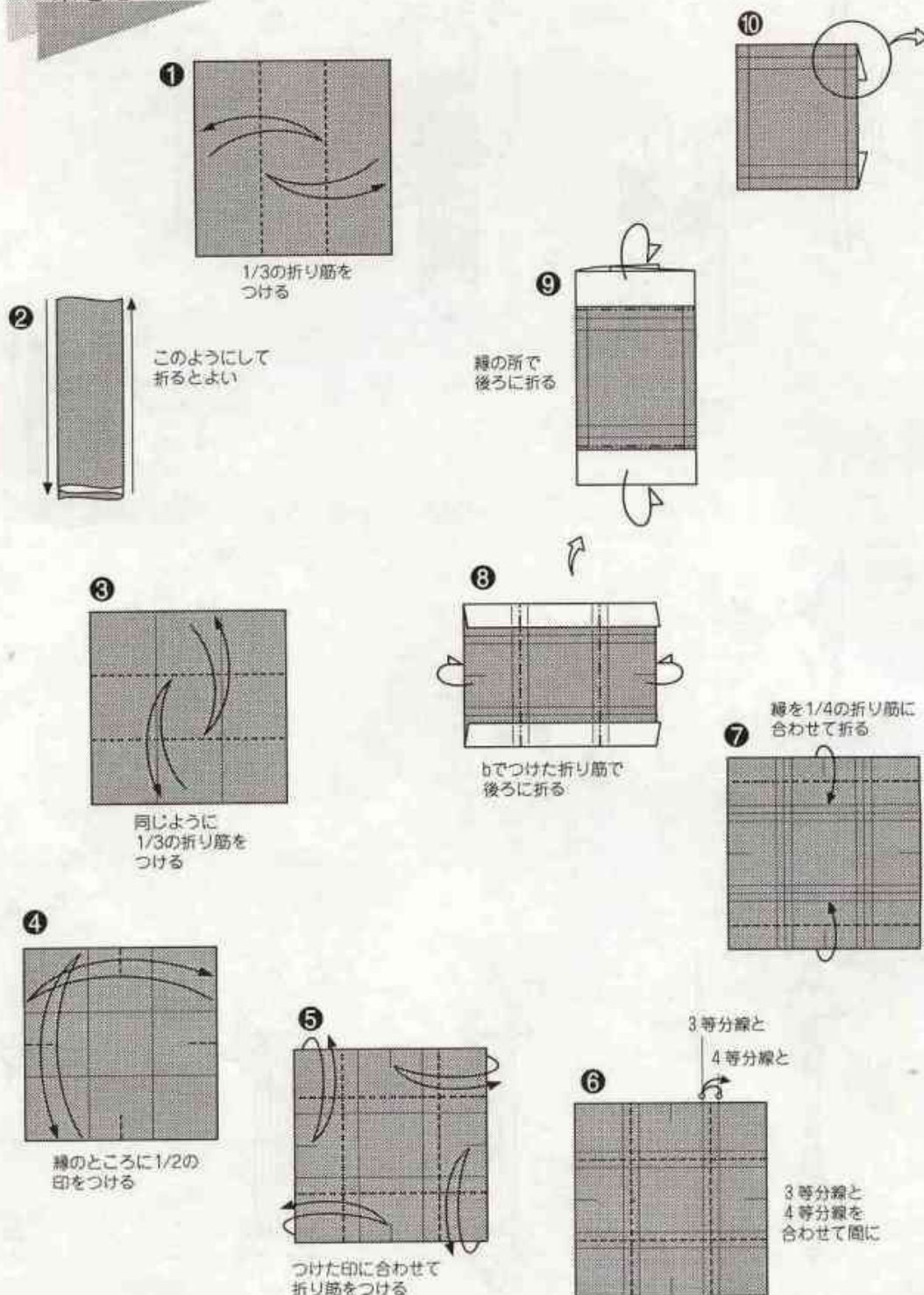


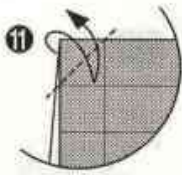
⑱ 細くする
ように折る
少し立体的
になる



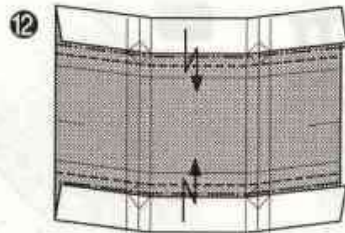
⑯ それぞれ
カドとカドを
結ぶ線に折る

糸巻き

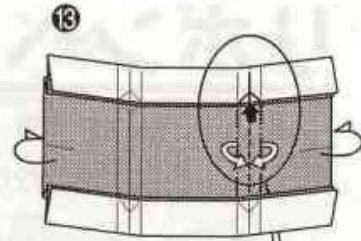




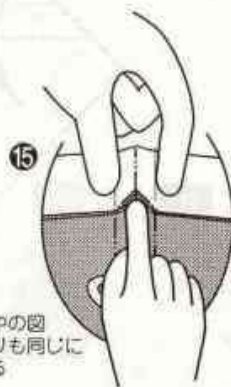
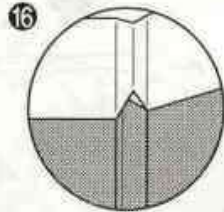
カドを折り筋に
合わせて折り筋を
つける
残りの部分も
同じに折ったら
dの状態に開く



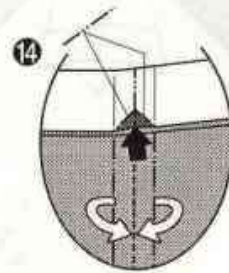
段折り



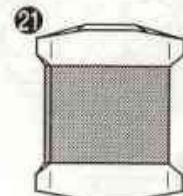
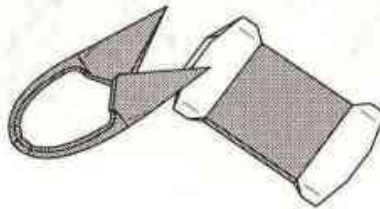
それぞれ端を
後ろへ折りながら
段折り



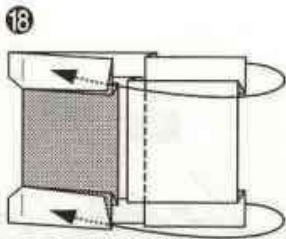
途中の図
残りも同じに
折る



片方を開く

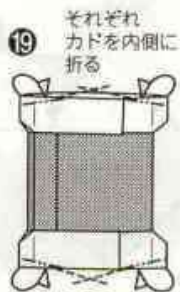


できあがり



それぞれすき間に
差し込んで止める

15



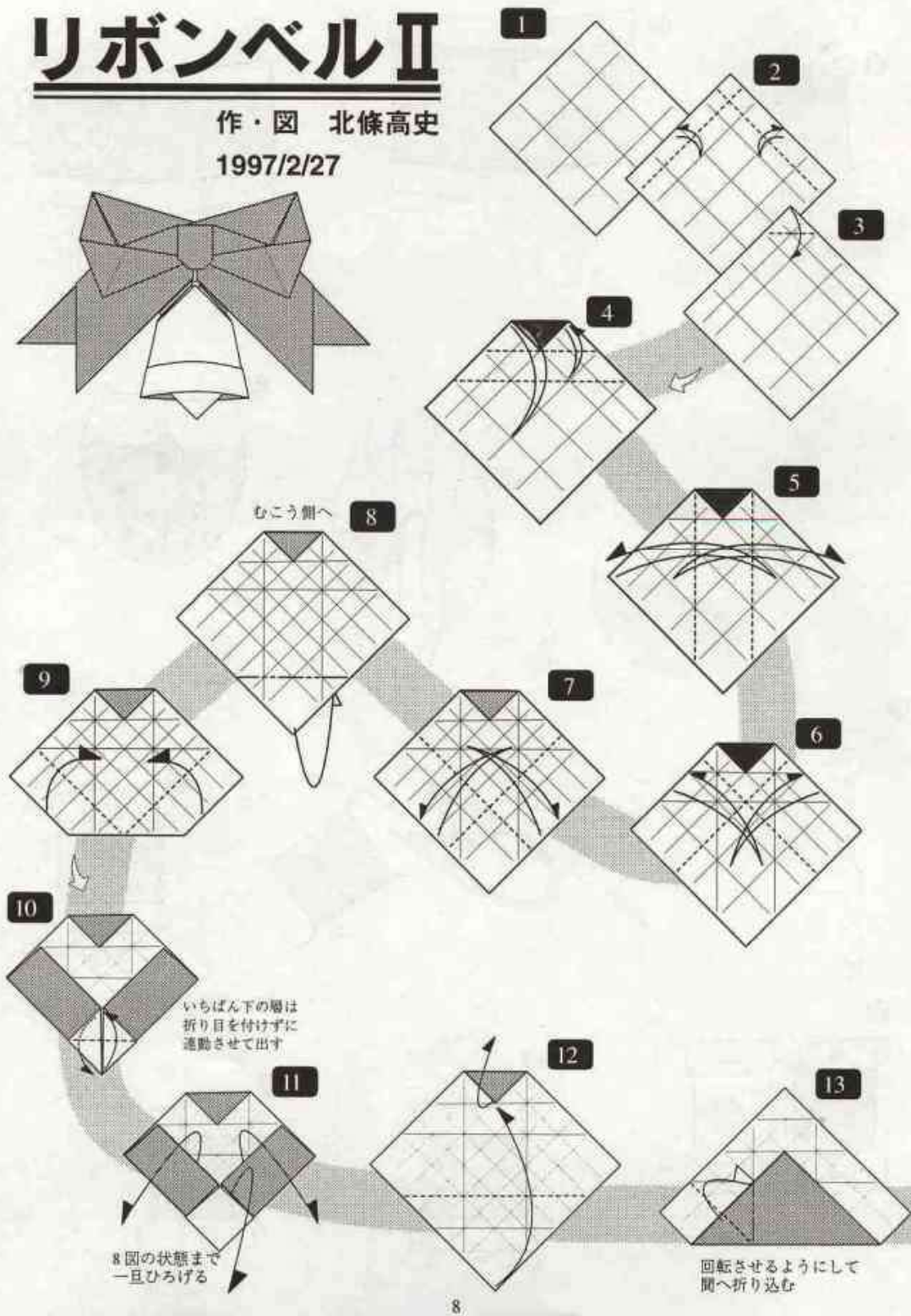
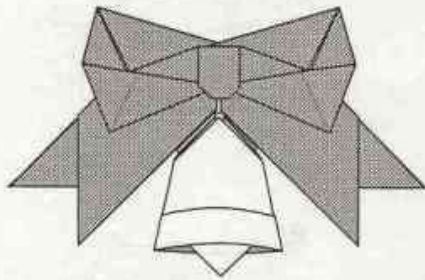
それぞれ
カドを内側に
折る

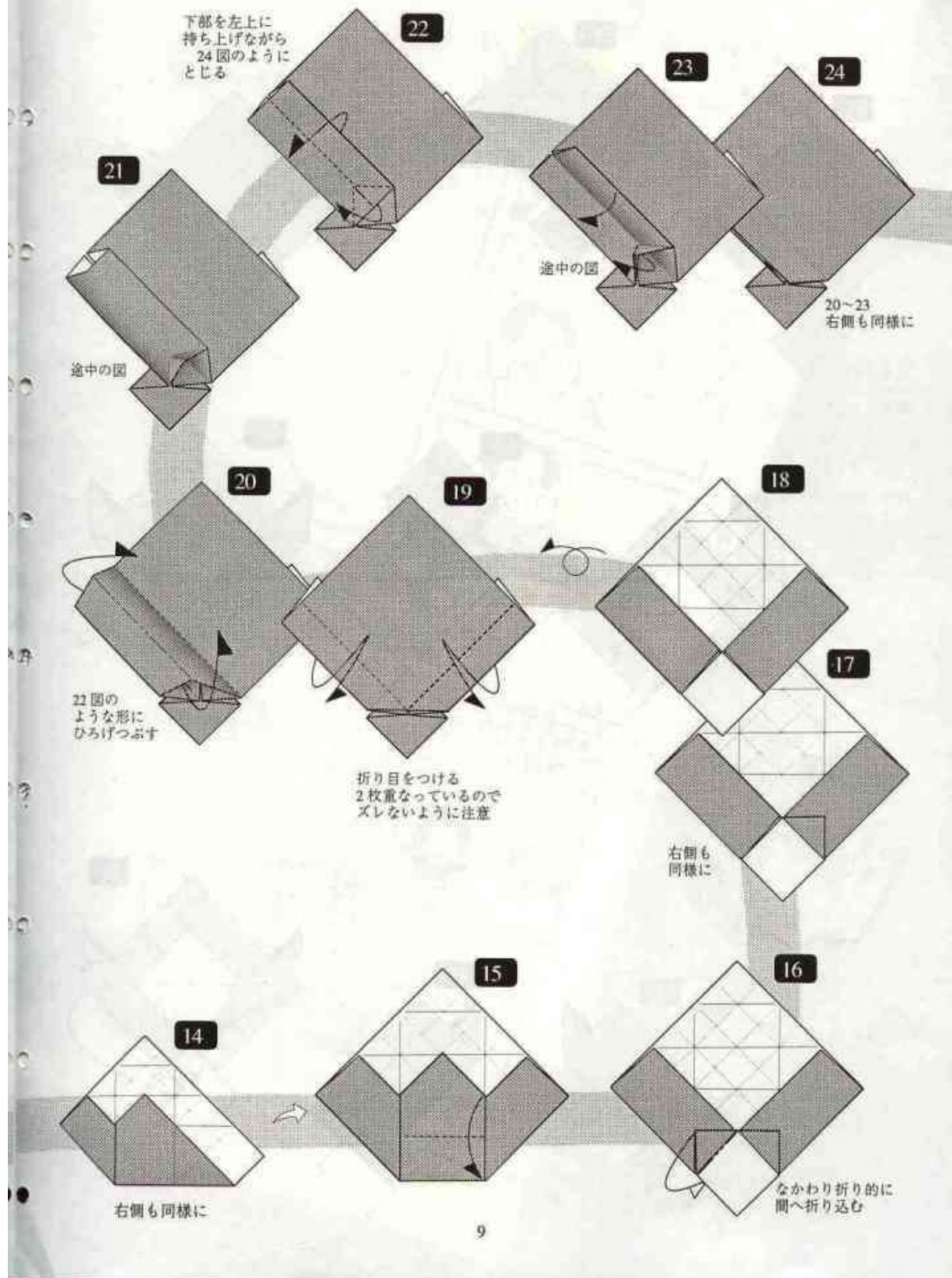


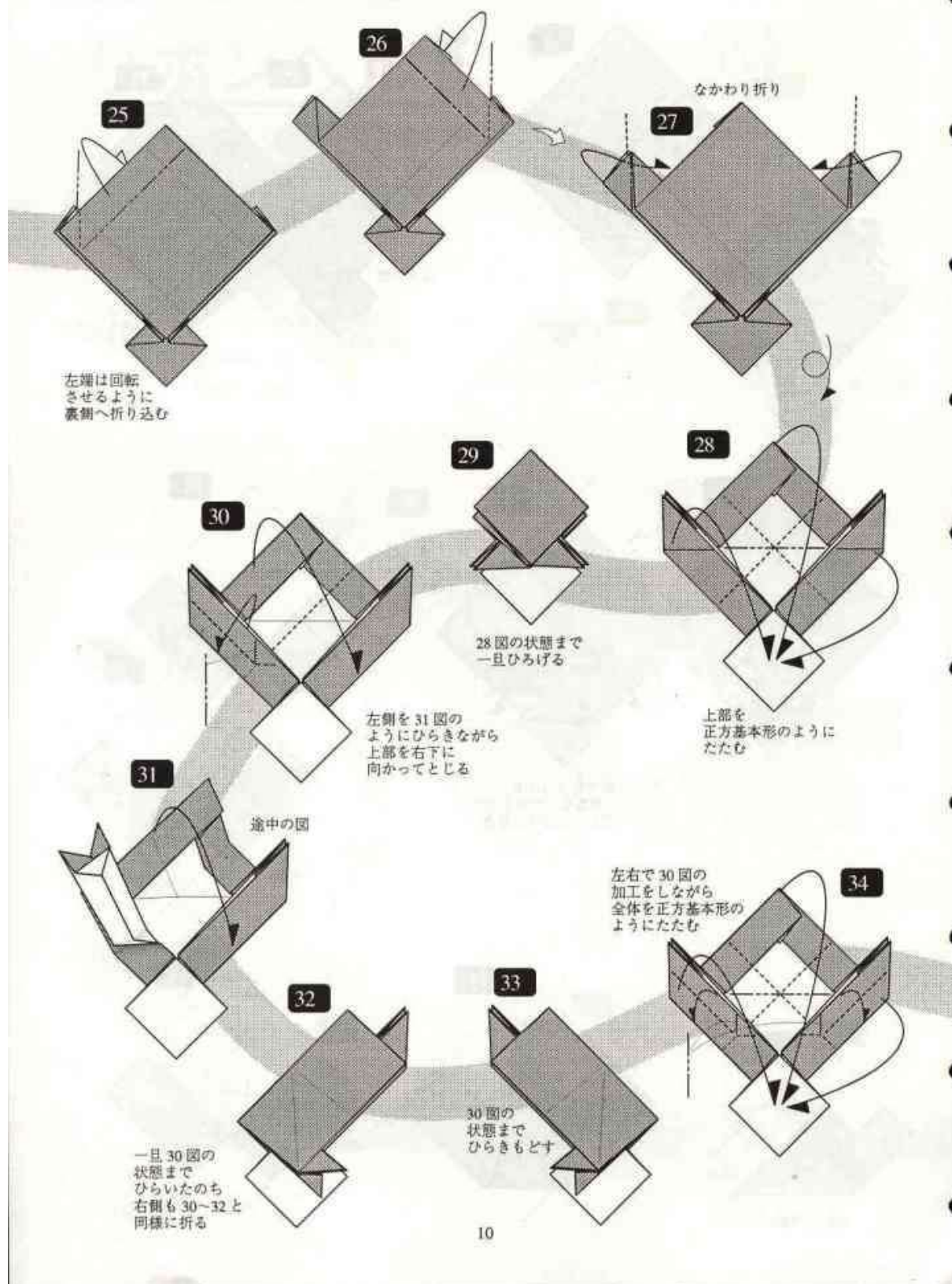
リボンベルⅡ

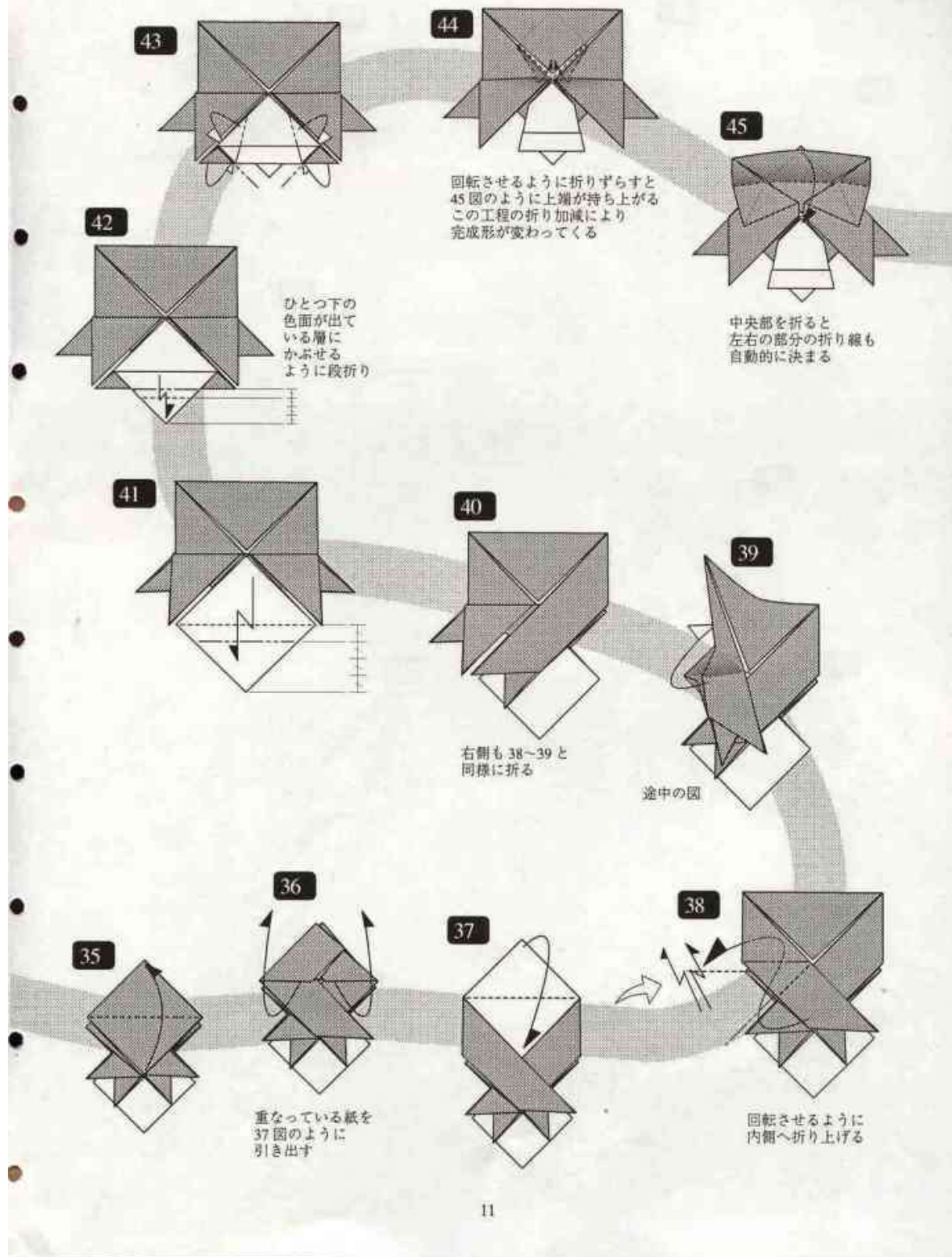
作・図 北條高史

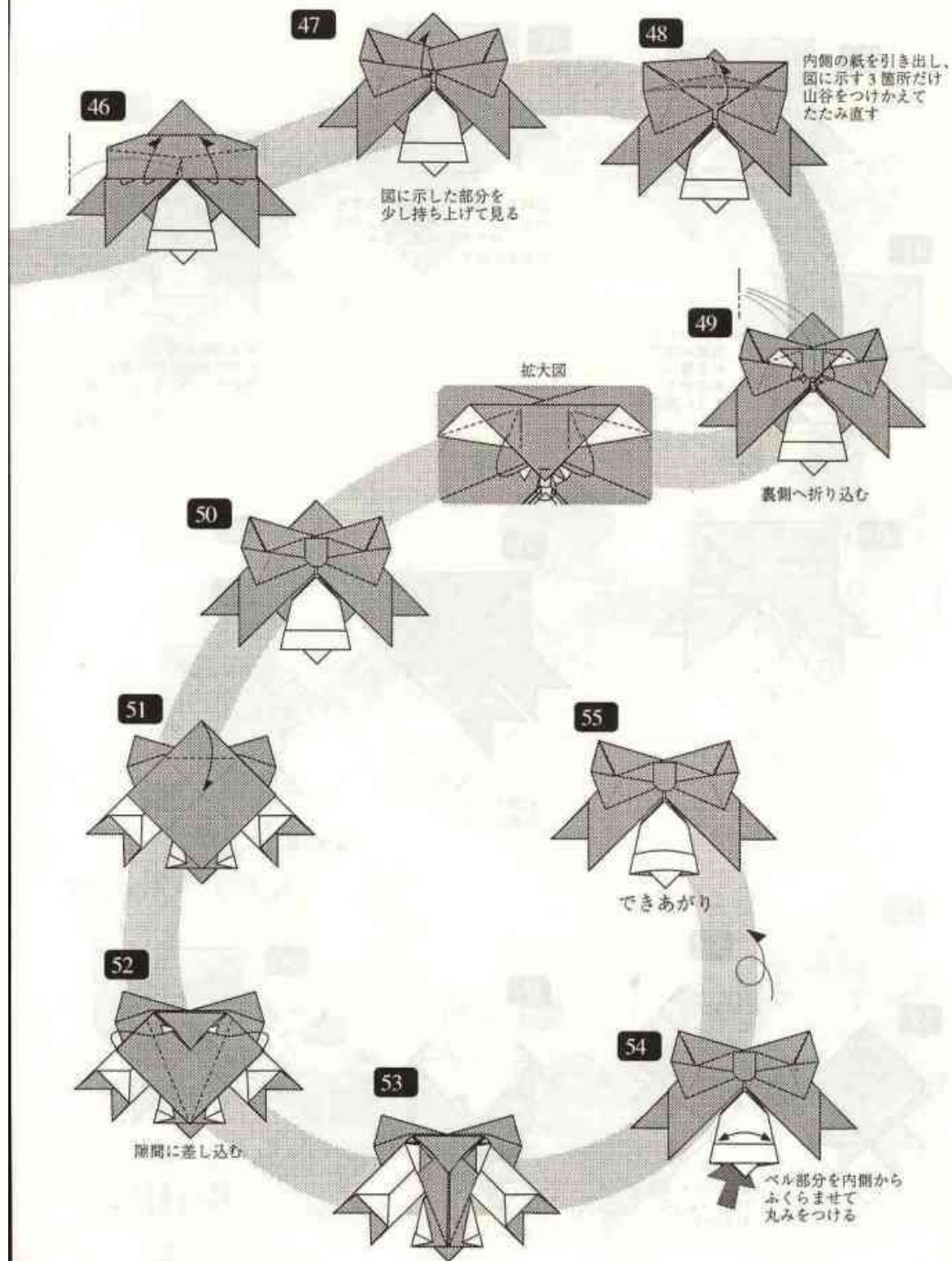
1997/2/27











吉野一生さんを偲ぶ会

1997年2月23日、文京区民センターに於いて「吉野一生を偲ぶ会」が開かれた。昨年8月11日に急逝した吉野団長の代行業を務めている西川誠司氏が開会の挨拶をした後、吉野さんに贈る言葉を以下の各氏が述べた。

吉野一生さんについての思い出

岡村氏：この区民センターの近くに昔樋口一葉や石川啄木が住んでいた。吉野氏も啄木のように若くしてこの世を去ったが存命中に素晴らしい仕事をしたと思う。

山口氏：吉野氏の病気のことを御家族から聞いたとき、茫然として目の前が真っ暗になった。折り紙を通じて彼と出会ってからの色々なこと、最後に一緒にスキー旅行にいった去年の2月、具合が悪そうだった吉野氏の様子等々、思い出すと今でもどうしてあんないい奴が・・と悔やまれてならない。

於保氏：彼は仕事上では私の部下であり、折り紙においては師匠であった。仕事での彼は妥協を許さずいつも完璧さを追求する人であった。彼が亡くなった今、彼のような完璧さを目指して、私が彼の分まで頑張っていきたい。

木村氏：スローン・カールソン氏の弔文「私のリクエストに応じて鯉の折り方(探偵団新聞第12号収録)を考えてくれて、折って贈ってくれて有り難う」を朗読する。

北條氏：吉野作品の芸術性の高さについて熱く語ってくれた。

布施氏：同じ時期に長期入院していた私は、入院している吉野氏の気持ちが合わせ鏡のように理解できたと思う。機械に弱い私に親切に教えてくれた吉野氏は本当に優しい人だった。

御両親：戒名に「折」「紙」という字を入れて欲しいと頼んだが、それは無くてできなかった。但し代わりに「哲」という字を入れてもらい、その一部に「折」という字があることに気づいた。住職に感謝し、皆様に報告したかった。

贈る言葉の間、隅谷氏編集による吉野氏のビデオが流され、御両親をはじめ全員で見入った。

献折紙花

贈る言葉の後、参加者それぞれが折り紙で作ってきた花を吉野氏の遺影に捧げた。わざわざ大阪から参加した土戸英二氏は、大阪折り紙協会有志からの花も持参し一緒に献花した。因みに大阪からの献花は全て両面カラーホイルによる作品で、主に

白やパステルカラーからなる他の作品群を圧倒していた。(さすがオーロラ輝子を育んだ土地柄だ by Y口氏)

恐竜全身骨格を共同制作

献花が終わってからティラノサウルスとトリケラトプス骨格を参加者全員で折った。参加者は熱狂的吉野ファンであるだけに、吉野骨格の2度や3度は折ったことのある者が殆どで、自宅に骨格を飾っているという参加者は80%以上であった(嘘です)。いつもは恐竜などを折ることの少ない、すてきな奥様方(加藤・千葉・初音・本位田氏)も、「もっと早く受付を済ませとけば、こんな難しいパートじゃなくてすんだのに・・」と言いながら、もともとある折り紙の実力を発揮し、美しく折りあげていた。また、ユニット折り紙を折っていることの多い服部氏は、「この折り図がおかしい」と主張し、少し自棄をおこしていた。パーツ折りに約1.5時間、各自できあがったパーツに自分の名前を記入した。その後、於保・渡辺・羽鳥・西川各氏が中心になり組立作業を行った。折りながら、組み立てながら、あらためて吉野作品の素晴らしさを実感するとともに、吉野氏との楽しかった思い出やいなくなってしまったことへの悲しさを語り合った。完成した全身骨格は期待していた以上によい出来ばえで、完成後骨格と御両親を囲んで記念撮影し、偲ぶ会は閉会した。完成品は吉野一生展の開かれているおりがみはうすに展示されていたが、現在はおりがみはうすの向かいにある果鴨信用金庫のショーウィンドウを飾っている。



ティラノサウルス全身骨格制作組



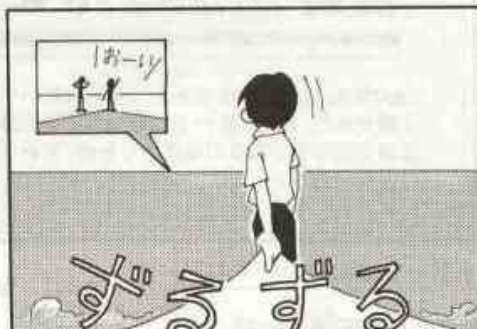
トリケラトプス全身骨格制作組

Rabbit Ear つまみおり

※終わるゆくものあれば、また始まるものもある。
8期目に入突する探偵団新聞は、まだまだへこたれ
ません。

ゴマツ
ビデオの 折ったもんがち!

□ギネス挑戦!□



「季刊をる」に感謝

山口 真

おりがみはうすができて、折紙探偵団ができて、「をる」ができた。すべてにおいてタイミングがよかった。どれか一つ欠けても今はなかったと思う。特に「をる」は、若手折り紙作家の活動、発表の場として大きな力を与えてくれた。ホップ、ステップ、ジャンプと大きく飛躍させてくれた「をる」。休刊は本当に残念でならない。育った若手折り紙作家の今後を考え、あとは如何に着地を上手にするかが私の役目のような気がする。今後の折り紙界のためにも「をる」が与えてくれた経験を生かし続けていきたいと思う。いい思い出をくれた「をる」。我々の中では「永遠に不滅です。」

木村良寿

「をる」創刊の話を聞き、「なんという無謀な編集者がいることか」と驚いたのは5年近くも前のことだった。ところが石川氏にあって話を交わすと、期待以上に作り手の気持ちがわかっていてはいないか。(編集者なら当たり前、というわけでもないようだ。)

「をる」の出現は、折紙界に大勢の人々を呼び込んでくれた。わが探偵団の会員約540人中で、をる読者は約360人。そのうち日本折紙協会会員ではな

い人が160人もいる。この人たちは「をる」が連れてきてくれたようなものです。(ちなみに日本折紙協会会員は約220人で、をる読者でないのはたった30人)

渋谷社長を始めとする双樹舎のみなさん、私たちのような者どもを作家扱いしてくださってありがとうございます。ろくに作品も作らないでごめんなさい。

ありがとう「季刊をる」

ところで石川さん、そのうちクラブチッタ行きましょう。

北條高史

毎号、「創作の現在形」が楽しかった。今度はどんなヤツが、どんな作品で驚かしてくれるんだろう、という具合に。発展途上の創作家たち

が、あれだけ大きくとりあげてもらえるのは大きな動みになったことだろう。かく言う私も「現在形」に載せてもらって、「をる」が号を重ねると一緒にいい方向へ成長させてもらったと思っているひとりである。もっともっと続いて、世間にも、折り紙界にも、いい影響の波動を及ぼし続けてほしい。

西川誠司

まず、「季刊をる」を実現した双樹舎スタッフの皆様には心から感謝と労いの言葉を送りたい。ご苦労様でした。吉沢、河合、笠原といった人達の作品を見て折り紙に魅せられた世代があった。「季刊をる」は、そんな世代の創ったプロジェクトだったと思う。新しいプロジェクトの種を蒔き、ひとつのプロジェクトはその役割を終える。新しい種が芽吹くのはそんなに遠い先のことでない。

「景気物語」

前川 淳

【疑問に「そうじゃ」とカネの声商業無情の響あり さらば双樹の紙の城 増刷きつい期替わりをあらわにす 折られる紙も販ひきぎ足らず ただ刷るのみの夢の「国史」 不景気もろに「をる」を減らす ひとつ「なぜ」の前川 みなに同じ】

(鑑賞) 出版界は薄紙のようにもろい。みなさん、気に入った本や雑誌は買って読みましょう。

宮島 登

折紙探偵団に入るきっかけは、「をる」で見た「第1回コンベンション」の告知でした。まだ2年も経っていません。「創作の現在形」で紹介していただいたのは、ほんの1年ほど前のことです。そして、私の「折り紙生活」は激変しました。ただ趣味でやっていた折り紙が、多少の「重み」を伴うようになりました。「をる」がなかったら、私は

いまだに、折り紙に対してコンプレックスを持ったままの、誰も知らない“おたく青年”だったでしょう。

田尻敦士

折り紙の世界に進むかどうか考えていたときのことを思い出すと、必ず「をる」創刊号の表紙が鮮烈に浮かび上がります。この本に出会ったこと、後にその作製に関わるようになったこと、すべてが大げさではなく私の人生に大きな意味を持つことになりました。折り紙界に「をる」があって、今の自分がある。読み返しつつ、初心忘るべからず。

「をる休刊に寄せて」

布施知子

折り紙を、これだけ豪華に、丁寧に、丁寧に扱ってくれた雑誌が今まであったらどうか。編集諸氏に大いに感謝する。この雑誌には、長く折り紙にたずさわっている人も、新人も、等しく晴れやかに登場していたのが印象的だ。

雑誌の休刊はまことに無念だが、折り紙界(そういうのがあるとして)に、すがすがしい潮流を呼び込んだ功績は大きい。作家、読者、出版社、編集者。力を溜めての復刊に期待したい。

吉野一生基金より

3月29日の探偵団例会において決定いたしました、吉野一生基金による海外折紙作家招待に関する内容をお伝えします。また、4月3日現在における基金の会計状況について報告させていただきます。

招待者選考方法について

1. 選考委員会は招待候補者を自薦、他薦を問わず公募する。折紙探偵団会員、基金寄付者、海外有力団体などから広く意見を募り、それを元に選考委員会が招待者を決定する。

ただし、本年度に限って時間的制約などから、選考委員会の一存にて決定させていただきます。

なお、招待候補者には創作者のみならず折紙普及活動者も含まれます。

2. 招待者は交通費・宿泊費として一定額の金銭を支給され、コンベンションおよび懇親会の参加費を免除される。

3. 招待者はコンベンションにおいて講習もしくは講演を行い、のちほど折紙探偵団に報告書を提出する。可能であれば作品展も行う。

会計報告

4月3日現在の吉野一生基金の会計状況を報告させていただきます。これまで、のべ180名(団体を含む)の方々から貴重な寄付をいただきま

した。謹んでお礼申し上げます。

会計状況(1997年4月3日まで)

収入	
オークション売上げ	61,000
吉野一生さんのご家族	100,000
吉野一生さんを偲ぶ会	32,247
「スーパーコンプレックス」印税	145,000
基金への一般寄付	863,000
支出	
事務用品・通信費	10,205
収支	1,191,042

以上をもって第一回の会計報告とさせていただきます。

寄付をいただいた皆様(敬称略)

赤沢大道、秋山一江、浅賀美恵子、荒川洋行、安藤賢司、飯沢秀幸、石井静子、石川光則、石堂高子、伊藤美智子、稲葉宏、稲見義子、井上和昭、井上富美子、岩垂久子、内海一恵、梅田 隆、榎本京子、大島久子、大塚恵子、大野依子、近江信一、岡崎リツ子、岡嶋 航、岡村昌夫、岡本貞三、笠松 望、加藤美子、釜島佑一、河内芳文、川上理子、川崎敏和、川瀬利弘、河西博厚、川畑文昭、川村みゆき、岸

睦典、北橋邦子、橋田和志、橋高美保子、木下一郎、木村正雄、木村美也子、木村良寿、熊切武徳、倉橋美代子、呉 正平、黒川紀男、郷原利夫、小口くみ子、小花光雄、小松英夫、小松安子、斎藤征子、坂口 久、逆瀬川貴司、桜井通子、笹出晋司、笹山祐子、佐藤健太郎、佐藤進也、佐藤裕美子、佐藤仁誠、嶋田浩一、清水大、清水かずみ、清水美穂、志郎啓斎、新谷力雄、鈴木京一、鈴木邦雄、鈴木正一、鈴木恒雄、隅谷和夫、千田則子、染谷淳一郎、高井弘明、高木 智、高梨 泰、高橋かづ、田川富美子、滝 甲敏、竹村光子、田尻敦士、立花澄子、立石浩一、田中 純、田中 淳、田中隆憲、田中正彦、田中陽子、田村菜穂子、千葉 京、張仁浩、辻 昭雄、津田真理子、土戸英二、津野ミエ、寺澤慶子、内藤裕紀子、永田紀子、中西麻香、中西健一、長濱枝子、西川誠司、西川直子、新田順子、日本折紙協会大阪支部、野口直人、野津哲雄、野中陽子、橋本多美子、初音みね子、羽鳥公士郎、羽鳥昌男、濱口美恵子、濱田隆幸、早川正和、早瀬照子、平田幸子、堀島邦幸、藤井隆道、伏見康治、伏見満枝、藤本久子、藤原 具、布施知子、北條高史、星野泰司、堀内萌子、堀江美香、堀切道子、本位田郎穂美、前川淳、前川純子、牧野正博、増田寿夫、松浦美子、松沢由碩、松下敬子、松下智余乃、三戸岡啓子、湊 一功、三本龍生、宮内俊治、宮城順、宮島 登、宮本真太郎、宮本正樹、村松保代、村山 愛、守屋朝子、森谷登喜男、八尾俊彦、矢野真楠都、山本房子、山口 真、山下 明、山下 周、山科節子、山田勝久、山田重則、山梨明子、山本鈴子、山本瑠子、吉岡岳延、米光富雄、米安隼人、和久教也、綿田治紀、渡辺亜希子、渡辺明広、渡部国男

おりすじ

中学生のころから白黒の写真しか撮っていなかった為か、色彩感覚が少しおかしいと言われることがよくある。

したがって折紙でも本来とは違う色で折ることは日常茶飯事である。

たとえば、紫のバツタ、青いラクダ、ピンクの馬、などなど。たまたま折りた作品があると手元にある折紙からそれらしい色を選ぶのだが、他の人から見ると全然違う色に見えるらしい。花なんぞ折ろうとすると本来の色がわからないものだから完全に適当である。

すると、私は一生懸命折ったものでも、家族から見ればふざけた物に見えるので(妹がそう言っていた)タンスの上に飾っておいても、いつのまにかごみ箱に供養されている。その上、ごみをそこいら辺に捨てておくと怒られる始末である。

そんな私だが、何故だか赤い折紙でしか折れないものがある。

無理にでも違う色で折ろうとすると気持ちが悪くなり、思わず折りか



赤い暴君竜

田村 葉穂子

けのものを破り捨ててしまうこともよくある。

それはティラノサウルスだ。

誰の作品だとしても絶対に赤い紙でしか折れない。難しかろうと簡単であろうと大人だろうと子供だろうと関係ない。とにかく赤でないと駄目なのである。

ほかの恐竜はいろいろな色で折れるし、ティラノサウルスの骨なら何色でも折れる。だけれども、肉付きのティラノサウルスはやっぱり赤でしか折れない。

仕方が無いのでティラノサウルスを折りたくなると、まず赤い折紙を探すことから始まるのである。そして折り終わったものはタンスの上に勝手に飾っておくのである。するとやっぱりいつのまにかごみ箱に供養され、また家族に怒られるのである。



迷探偵 オリン君

作: 山梨 雅弘



ギャラリー

おりがみはうす

折り紙教室案内

「千羽鶴折形」岡村教室

参加者募集

古典研究でお馴染みの岡村昌夫氏による「千羽鶴折形」の解説と折り方の指導。昨年まで3年間にわたっておりがみはうすで続けられていた古典研究の教室がリニューアルされて参加者を募集しています。

今では折り紙の歴史のスペシャリストとして有名な氏の豊富な知識と資料でやさしく解説指導してくれる教室です。

日時等は参加者との都合をはかって決めていく予定です。月1回、昼と夕方からの教室があります。どちらも2時間程度肩の張らない楽しい教

室です。申込登録はお早めに。

参加費 2000円 お問い合わせはおりがみはうす (03) 5684-6040 まで。

折紙探偵団定例会の

お知らせ

◆4月の定例会

4月26日(土) 午後2時ごろ～8時頃

5月31日(土) 午後2時ごろ～8時頃

いずれも文京区民センター(都営地下鉄三田線 春日下車) 参加費無料

ホームページ公開中

公開URLは、

<http://www.ask.or.jp/origami/> です。

団員パスワードは、大文字/小文字を区別して、Pyramid です。

郵便振替番号

折紙探偵団(第8期 2000円)

00180-8-579860

吉野一生基金(一口 1000円)

00190-3-727623

発行・折紙探偵団

〒113 東京都文京区白山 1-33-8-216

ギャラリーおりがみはうす内

Phone (03) 5684-6080

発行人・西川誠司

編集人・岡村昌夫